

肝内門脈慢性完全閉塞を伴う挙上空腸部異所性 静脈瘤に対し血管内治療を施行した一例

自治医科大学 放射線医学講座 濱本 耕平

7年前に胆嚢癌疑いに対して胆管空腸吻合術を施行（病理結果では良性：胆嚢ポリープであった）。2年前に門脈閉塞をきたし内科的保存加療された。その後、貧血、黒色便を繰り返し、精査で挙上空腸部静脈瘤からの出血が疑われたため、当院紹介受診。造影CTでは肝内～門脈本幹の慢性完全閉塞で胆管空腸吻合部に静脈瘤およびcavernous transformationを認めた。出血シンチグラフィーでも挙上空腸からの出血が疑われた。門脈ステントは困難と判断、PSEも考慮されたが、直接的治療として回結腸静脈経由で静脈瘤塞栓の方針となった。NBCAとコイルを用い胆管空腸吻合部の標的静脈瘤を塞栓し、術後に標的静脈瘤の退縮を確認した。しかしながら持続的輸血を要する経過であり、追加治療が考慮される病態であった。異所性静脈瘤に対する塞栓術の治療選択と戦略について報告する。